ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌　2024

Take free!

なび

3月号
vol. 205

巻頭コーナー

時流を〝なび〟する誌面をめざして

「みんなでカレーを食べよう」
みんな食堂

時流を“なび”する誌面をめざして

第２０１号から編集長が変わり、いよいよ次号から「特集」を中心に編集体制を変更する。これまで編集部は特集の企画や取材、執筆を通じて、様々な分野で社会活動に取り組む企業や団体、若者など多くの仲間に出会ってきた。

これからの特集ではこうした仲間を新たに編集部に迎え、彼らが日々感じる社会課題や課題解決に向けた実践あるいは関心を発信していこうと考えている。

そこで今号では過去の特集を振り返り、新しい指針を探ってみたいと思う。特集は次号から再開の予定。今後もどうぞ『なび』にお付き合いください。

『なび』を創刊した人びと

17年前の2007年1月1日、株式会社ナイス代表取締役の冨田と社員の手で『なび』が創刊された。誌名の由来は、N＝NICE（ナイス）、A＝ART（芸術）、V＝VENTURE（冒険）&VOICE（声）、I＝ISSUE（発行物）。わたしたちナイスの視線で発信することを大切にした。

当初の体裁はA3サイズで両面刷りの4つ折り物だった。各事業部の日常や街のあれこれをお届けする情報誌の趣きだった。

＼なび創刊号／

「湯加減のような〝いい加減〟さで」

どこかで聞いたようなフレーズではないだろうか？　そのとおり。現在も連載中のコラム「いい湯かげん」の原点である。創刊時のあいさつで冨田は「私は自分がいい加減な人間であることを認めつつ、湯加減のようないい加減な仕事をしたい。社会運動は、人のために尽くすことと気負ってきましたが、ひとつひとつの出会いや営みによって、この街に溶けていくことが社会運動の土壌になる。同和行政、ホームレス問題、生活保護改革、障がい者雇用、まちづくり…株式会社ナイスは『いい加減』を企てる『社会的企業』としてこの街に溶けていきたい」と記している。現在に至るまで「いい湯かげん」はこの信念に貫かれている。

「楽塾ハイライト」

『なび』を振り返るうえで忘れてはならない人物のもう一人が、佐々木である。佐々木は、株式会社ナイスの事業として野宿生活者や生活困窮者の相談窓口、大人が学び直しのできる学校「楽塾」を創設。長年に亘り編集長を務め、様々な企画や執筆などで『なび』を牽引してきた。このコーナーでは、そんな彼の日々の奮闘ぶりをお伝えしてきた。

編集体制を一新

2013年4月の第74号にて、編集長、編集員、デザインから印刷まで、大きく体制が変わった。誌面も横書きから縦書きへと変わり、現在のスタイルに引き継がれている。特集や連載企画コーナーなども始まり、『なび』の読み物としての特徴が際立ってきた。

特集「都市のインフラ」

一般に「インフラ」と言うと、自治体やゼネコン、デベロッパー、コンサルタントらによって建造

される住宅、道路、公園、学校、水道、電気などのライフラインが思い浮かぶが、この特集では、地域課題を解決するためのつながりづくりや互助活動などのソフト活動も人びとの生活を支えるインフラと捉え直し、子ども居場所、リサイクル、医療、大衆演劇、まつりごとなどを取り上げた。こうした活動は地域力を高め、街を動かす大きな力を秘めている。

地域運動の変革

コーナー「リレーなびトーク」

リレー形式で新たに出会った人とトークするという企画。編集員が西成で出会った人物と街を歩きながら、プライベートや仕事、街のことなど、まったりトークを繰り広げた。活動フィールドや背景の異なる二人がノープランで会話するからこそ新鮮でおもしろい発見があった。

2015年7月、西成区北西部地域では新たな地域運動が始まろうとしていた。大阪市行政は2016年3月末をもって市内の市民交流センターを廃止、事実上隣保事業をしないという政策を強行する。そこで、西成地域では行政に頼ることなく住民自らの力で民設・民営隣保館を設立するという動きが起こり、第101号という節目を迎えた本誌は隣保館をテーマにした特集を連載した。

特集「隣保館、あり〼」「となりの隣保館」

市民交流センター廃止という大阪市の決定に先駆けて、西成地域では2016年1月に全国初の民設・民営となる「にしなり隣保館スマイルゆ～とあい」(以下ゆ～とあい)がオープンした。本誌ではこれらの特集で西成地域に残された社会問題や隣保館の役割、ゆ～とあいのコンセプトである「居場所・つながり・出番づくりから人づくりへ」を紹介した。また、「となりの隣保館」では、茨木市、箕面市、大阪市住吉区、西成市民館の皆さんと対談し、隣保館の進むべき方向を検討した。

コーナー「にしなりのこいさん(小遺産)」

引き継ぐべき地域の遺産は歴史や建造物だけではなく、「人」もまたかけがえのない大切な遺産である。「こいさん」という船場商人の言葉と「遺産」を掛け合わせた造語で表現し、西成地域の運動を担ってきた先輩方に取材した。「こいさん」目線で語られた、浴場建設、識字教室、着付け教室、西成障害者会館、株式会社ナイスといった西成の記憶を記録にとどめることができた。

世代の交代

2018年11月第141号以降、現在の第205号に至るまで、『なび』は30～40代の編集員が中心となっている。先輩たちから引き継がれた『なび』を継承しつつ、自分たちが日々取り組む活動の中で感じたこと、学びたいこと、発信したいことを特集やコーナーにしてきた。

特集「すむすむ」

入居・転居・市営住宅自治会から寄せられる相談を受けて、「市営住宅や老朽住宅、空き家をもっと活用できないかな?」という課題解決のヒントを探しに、様々な地域の実践事例を取材した。

特集「革の流れのように」

皮革のまちの靴職人の技を伝える西成製靴塾を卒業し起業した靴作家の現在地、和太鼓製作技術を今に伝える企業、三味線皮を扱ってきた地域の歴史、原皮から素材としての皮革をつくる工場など、皮革業界で活躍する幅広い世代の人びとに流れ着いた特集になった。

特集「コロナ炎上」

2020年、世界は未曽有の炎上を経験した。人流が止まり街が止まり、社会全体が止まった。突然の長期休学、マスクの着用やワクチン接種をめぐっては世論が混乱し、業務は次々とオンラインやテレワークに切り替えられていった。そんなコロナ禍の中、医療・福祉・教育現場、IT環境の整備、住まいと仕事の支援、給付金申請の現実などエッセンシャルワークの実態を垣間見た。

新しい仲間とともに

リニューアルに備えて急ぎ足で過去の特集を振り返ってみたが、その時々の時流を反映していて参考になった。『なび』の17年の歴史を引き受けつつ、新しい仲間と時流を表す誌面づくりをしていきたい。

興味・関心のある方は、株式会社ナイスのホームページにバックナンバーをあげているので、そちらをご覧ください。

文責:西田吉志

なび
バックナンバー

にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

歌人に愛された「鰻」を求めて「楠もと」

最近すぐ疲れるようになったなと思うことが多い。そんな時は食べ物でパワーをつけようと考える。その中で滋養強壮に良い食べ物と言えば、筆者は真っ先に「鰻」を思う。奈良時代の歌人で三十六歌仙の一人、大伴家持の歌にも「石麻呂に 吾れもの申す 夏痩せに吉しという物ぞ 武奈伎(ぶなぎ=うなぎ)とり食せ」とあり、はるか昔からうなぎは疲れや夏バテに良いということが知れ渡っていた。というわけで筆者

も大伴家持に倣い、今回は疲れた体を労わるためうなぎ料理を求めて、「楠もと」を訪問。

外観には赤の背景に黒字で「楠もと」「うなぎ」と大書され、とても目立つ。前から気になっていたこの店に来ることができ、気分はうなぎのぼりで扉を開く。

今回は初のお昼どきの取材で13時頃に訪れる。店内はカウンターに8席、調理場では大将と娘さんの2人でお店を切り盛りしている。

カウンター席に座り、早速メニューを拝見。するとまず目に飛び込んできたのがかわいらしい子どもの写真!? よく見るとメニューだけでなく、カウンター席のいたるところに幼児の写真が。これは後でお聞きしようと横目で見ながら再度メニューへ目を移す。お昼のうなぎメニューはうな丼、うな重、特上うな重の3種。今回は特上うな重に決めた。「特上」が言い慣れていないせいか、冷静さを取り繕って「特上うな重で」と言ったつもりが、少しにやついていたような気もして残念なかんじに。

[笹川勝正]久しぶりに運動のためにジムへ。筋肉痛になるだろうなと思っていたが、翌日、翌々日ではなく3日後にピークが。運動不足を痛感。

[沖田一志]前に書いてたRPAの続きでLINE公式アカのAPIを使ってみた。最近のPCにはwebに情報を送信する仕組みが標準装備されてることを知った。コマンド操作だけでLINE投稿って凄くない?

調理場からうなぎを焼くいい匂いが鼻孔をくすぐる中、改めて店内を見ると、お昼はうなぎだけではなく、定食も提供している様子。定番のからあげや塩さば定食などもある。また夜は一品ものも多々あり、筆者の席の前にはボトルキープされた焼酎が並んでいたので、夜の憩いの場としてもあるのだなと察した。

さて特上うな重が筆者の前に登場、お吸い物、香の物と茶碗蒸しもついてくる。早速うなぎを一口、肉厚のうなぎが柔らかく口の中で溶けていくのを感じながら、夢中になって食べる。美味しい! その一言に尽きる。タレがあるからうな重は美味しいという人もたまにいるが、そんなことはない。うなぎそのものの味わいを感じる。茶碗蒸しもお吸い物もさすがだなと思わせる一品。ゆっくり味わうつもりが、一気に完食してしまう。

大将にお聞きすると、お店は元々大国町の方で30年程やって、花園町に移ってからは13年、合計40年以上もうなぎ料理に携わってきたとのこと。また気になっていた子どもの写真は、お孫さん。入店のときに「おっ!」とびっくりしたのは、店番の娘さんがその子をおんぶしていたこと。常連さんが背中の子に「元気だね」「何歳になったの」など声をかけている。これが心温まる懐かしの日常風景なのだなと思い、胃袋も心も満足してごちそうさま。

斎藤茂吉はうなぎが大好物で有名だが、どうしても歌ができない時にはうなぎを食べて一気呵成に十首を詠んだと日記にある。筆者も今日の仕事は美味しいうなぎのおかげで一気に進められそうだなと思いながら帰り道を歩く。

文責:笹川勝正・山村裕太

楠もと
住　所:西成区旭1の5の12
営業時間:昼11時30分~14時
　　夜17時30分~20時
定 休 日:毎週日曜日
電話番号:06-6631-6169

[谷口円]記念切手が好きで定期的にチェックしています。でも近年は請求書がPDF化して、めっきり切手を使う機会が減ってしまいました。かわいい切手を使うために手紙が書きたい。

[田岡秀朋]電動キックボードをあちこちで見かける。原付免許不要の気軽さの半面、事故も増えている。ライドシェアも解禁間近。規制緩和と随時の見直しはセットで。

些事争論

些事でも何でも気になったらあれこれ考えてみよう。いいこと思いつくかもしれないし。気づいたら西成にたどり着いていた、或るオタクのもりもり系コラム。

『読書のススメ』

「あなたの趣味は何ですか?」と聞かれると「スポーツ」「音楽鑑賞」と並んでよく出てくるのが「読書」。ただ「読書」は固い印象を与えてしまい、会話が広がりにくい場面も多々ある。でも読書は楽しく、奥が深い。

本誌読者は昨年図書館にどれくらい行っただろうか、何冊本を読んだろうか。読んだ本の数を競うつもりはない。しかし大人になって色々と経験するなかで、読書はたくさんの気づきをもたらしてくれるとしみじみ思う。

読書が好きになるきっかけは人それぞれだが、小学校低学年の時に『はれときどきぶた』が大好きで繰り返し読んでいた。高学年の時に出会ったのが『ズッコケ三人組』だ。小学校の図書室でも、近所の図書館でもいつも借りて読んでいたが、結局、親にねだってシリーズをほぼ全て買ってもらった。特に『うわさのズッコケ株式会社』はその内容を真似するほどだった。

歴史好きなことから中学校では司馬遼太郎を筆頭に歴史小説にはまり、高校の国語の授業では夏目漱石『こころ』との運命的な出会いがあった。その後さまざまなジャンルを読んでいる。休日に一日自由な時間がもらえたら、朝から晩まで図書館で本を読んでいるだろう。

先日、読書啓発の団体の交流会に参加した。自己紹介の時にお勧めの本と内容を参加者全員が順番に話していった。そのことを当日まで知らなかったので、たまたまかばんに入れていたダブル不倫の小説を紹介することになり、説明に困った。でも、このような会があることは素晴らしい。そこで紹介された本は現在少しずつ読んでいる。新たな本との出逢いは刺激になる。

近ごろは紙媒体からの変化や音声によるものなど、読書の形も変化しているが、図書館の存在は相変わらず大きい。日本図書館協会のサイトで経年変化を見ると、図書館数は2022年時点で3315館。30年前に比べて約1200館増えており、蔵書数も1992年の1億8523万2千冊が、2022年では4億6384万9千冊と約2・5倍に増えている。増加の背景には、利用する住民の多様化や新設への反対の声が上がりづらいことなどがあり、行政も地域活性化の目玉にしやすいのだろう。

だが図書館数や蔵書数とちがい、1992年よりも減っている数値がある、それは資料費だ。来館者からのリクエストや新刊などの購入はこの資料費から捻出する。2003年の324億8000万円をピークに2022年では276億4325万円に減少、つまり読みたい本や新しい本が購入しづらい環境になっている。

たとえば人気の本を貸出予約すると50人待ちになる時がある。貸出期間が2週間として単純計算をすると100週間、つまり2年以上待つことになる。中身が伴わない図書館を増やすのはいかがなものか。今後の人口減も気になるところである。

つい最近読んだ高校生の青春小説で思わず落涙したが、そんな本との出会いが続けられるように、図書館の真の整備を願ってやまない。

ハンプティ・T

[安田拓也]「脱力」には、無力感のようなネガティブな面もあれば、運動のパフォーマンスを向上させる有効な手段という面もある。でも基礎がないうちから脱力すると型がなくなってしまうから要注意。

[福井龍磨]このところ、李博士(イ・パクサ)の「ポンチャックディスコ」をよく聴いている。限りなくチープで胡散臭いが、聴いていると全身に活力がみなぎってくる。料理や掃除もはかどる魔法の音楽。

2月はそう恒例の赤いアレがやってきます。子どもたちは「今日来るの？ 来たら(新聞で作った)豆で退治してやる！」と意気込んでいましたが、さてさてどうなることでしょう？ 年長組は慣れたもの。年中組は意気揚々と戦々恐々が半分こ。年少組はやっぱり大泣きしていました。心に邪気が宿りやすい季節、今年もしっかりと退治しました！

大阪市の住民参加型地域組織「地域活動協議会」の活動に橋を架けよう「近ツ橋【ちかつきょう】」

近ツ橋

三世代交流「ふれあい喫茶北津守」

毎月第2日曜日の北津守老人憩の家では、子どもから高齢の方まで様々な世代の地域住民で賑わっている。「ふれあい喫茶北津守」では、トーストまたはホットケーキ、コーヒーまたは紅茶(ココアやジュースもあり)に、ゆでたまごが付いて100円という価格でモーニングを提供している。

毎回約80人の参加があり、多い時には椅子がなくなるというほどの盛況ぶりだ。大人はテーブルを囲んで会話を楽しみ、子ども達はホワイトボードでお絵描きを楽しんでいる。受付や厨房は地域ボランティアが慣れた手つきで担う。

ふれあい喫茶北津守は1996(平成8)年、憩の家の開設からはじまった。当初は平日に開催をしていたが、若い世代が参加できるようにと開催を日曜日に変更したそうである。

北津守地活協では、喫茶の他にも食事サービス、体操&ボッチャ、健康教室などを定期的に開催している。3月にはウォーキング講座や多文化の取り組みも企画中と、活発に活動している。

ふれあい喫茶北津守
毎月第2日曜日 11時～13時
北津守老人憩の家
(西成区北津守3の8の8)

[西田吉志]2007年1月から今年で17年が経ち200号を超えている。執筆者、取材先、各コーナーへの登場、読者の方など、この1冊がこれまで多くの方とつないでくれた。本当に感謝します。

葉っぱの吐見（といき）

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。

「ヒヤシンスの葉っぱ」の巻

かわいい花を咲かすため
とおい国からやってきた
1ごう　2ごう　3ごう
わたしたちは三銃士（さんじゅうし）
1ごうはお兄ちゃん
するどい葉っぱで虫をけちらす
2ごうはお姉ちゃん
やさしい葉っぱで蕾をつつむ
3ごうは私
たのしい葉っぱで元気をあたえる
われわれにお任せください。
なにがあってもお守りします。
春が来るまでもう少し
春が来たならエンジン全開
花が咲いたらおつかれ様

赤井まゆみ

ヒヤシンスのこと

ユリ科ヒヤシンス属の多年草。花言葉は「スポーツ」「ゲーム」「悲しみ越えた愛」

用算用算皮胸

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

政府は児童手当拡充など「加速化プラン」を実施する。財源の柱の1つは「子ども・子育て支援金」。岸田首相はこの支援金について、平均月500円弱／人の負担という見通しを述べ、「歳出改革と賃上げで負担軽減の効果を生じさせ、実質的な負担は生じない」と説明した。

この説明、どうも疑わしい。保険の種類や所得によって負担額が変わるため、現役世代は負担が増える可能性もある。野党からは「事実上の子育て増税」という指摘が、ＳＮＳでは「月500円弱」というワードがトレンド入りするなど批判が相次いでいる。

確かに最低賃金の引上げや現金給与総額の連続プラスなどもあるが、実質賃金は20ヵ月以上マイナス。物価高に賃金上昇が追いついていない状態を解消し、ごまかしとも取れるような説明を辞めなければ、批判が止むことはない。

（寺本良弘）

いい湯かげん

リバティの復活に感無量

1985年12月から2020年5月まで浪速区で開館していた人権博物館「リバティおおさか」が、25年を目途に森之宮の大阪公立大学で「復活」するという大プロジェクトが進行している。部落解放同盟大阪府連合会（以下、府連）の主導で民間からの寄付金の募集が2億円を目標に取り組まれている。西成でも部落解放同盟西成支部の寺本良弘さんの呼びかけで寄付金が募集されている。

ことの始まりは、橋下徹大阪府知事（当時）が視察の後、「公費負担が大きすぎる」「展示内容が偏ってはいないか」などの理由で大阪府市が補助金を打ち切り、ついには20年6月に建物は解体されてしまった。

府連と財団法人大阪人権博物館が存続要求の矛先を新天地に求めた結果、22年4月に開学した大阪公立大学との協議が成立し、25年新設の森之宮キャンパス内での「リバティ復活」をめざすことになった。財団法人は所有する人権資料等を寄付し、大学は資料保全と展示公開、研究や教育への活用を約束した。その際、府連は諸費用を2億円と目算し、寄付でそれを賄おうと呼びかけたわけである。「雨降って」むしろ府連の「英断」だったと感謝し、微財ながら応援したいと思う。

西成支部は昨年の秋、大阪城公園内の松田喜一さんらが顕彰されている社会運動顕彰碑と教育塔、ピースおおさかを訪ねた。隣には森之宮キャンパス予定地があり、こんないい場所にリバティが復活することを期待していた。『詳伝 松田喜一』もそこに納められることになるが、先達たちも喜んでくれるだろう。

さて、ボクの感想だが、リバティおおさかの一番の魅力は「運動史」にある。財団法人の朝治武理事長は何かのインタビューで、リバティに保存されている「現物」一つ一つにその時代を生きた人々の息づかいが遺されていて、とても書き尽くせない魅力があると話されていて感銘を受けた。

ボクも『詳伝』を書きながら、いくつかの「言葉」に運動史の「力」を垣間見た。一つは、部落解放の法律は「わが国社会の悲願」であったという言葉。何度も聴いた気がするが、運動史を編みながら「社会の悲願」という言葉の力に想いを新たにした。もう一つは、松田喜一さんの「賽の河原に石を積む」という言葉。差別も戦争も運動の挫折も体験した先達の言葉の力に感嘆した。

さらにもう一つ。明確な言葉にはなっていないが、『詳伝』では松田さんだけじゃなく、できるだけたくさんの先達の人生と運動を紹介しようとしたが、ボクはその人々と運動を「地域に溶けていく」と表現した。地域の土壌となって溶けて民主主義とか人権を育むという意味だ。「民衆史観」とでもいうものだろうか、部落解放の運動史にはそんな魅力がつまっている。

ともかく乞うご期待だ。リバティが復活して良かった。運動史が途切れなくて良かった。

リバティおおさか
寄付金募集サイト↓

冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[若松司]隔月掲載していたビッグ・アイ「あーと工房みずのみば」の作品シリーズが先月号で終了。作品から溢れる迫力やらユーモアやらがちょっとリッチな気分にしてくれた。作者の皆さん、ご協力ありがとうございました。

[山村裕太]還暦を迎えた母が最近ゴルフにドハマりし、ホールデビューも果たした。スコアを聞くと私よりも良いようで、元気な親を喜ぶべきか、自分の下手さを呪うべきか複雑な気持ちになりました。

地域の縁を心でつなぐ

松向寺さんの心の時間

ユーラシア大陸最西端はポルトガルのロカ岬。１４０メートルの断崖の先に見えるは果てしなく続く大西洋。その断崖に建てられた石碑には詩人カモンイスが詠んだ「ここに地終わり海始まる」が刻まれています。同じ地点であっても、「終わり」か「始まり」のどちらに目を向けるかによってこの地点の意味が変わってきます。

これまでも、通夜では「ここに人生は終わり仏に生まれる」と説いてきましたが、やはり「終わり」と「始まり」のどちらに目を向けるかで「死」の意味が変わってきます。キリスト教の２０００年、仏教の２５００年余りという長い歴史のなかで、それぞれの信仰に応じた「ものの見方」が「死」を絶望から希望に変え、多くの人を救ってきました。

「人間は考える葦である」で知られるパスカルは、「人間は弱い存在であるが、思考する偉大な存在」という言葉も遺しています。いつの時代でも思考し「ものの見方」を深めて行くところに、これまでとは異なる人生の意味を知るようになるでしょう。

松向寺　通法

ココドコ

ここはドコ？
わたしはダ～レ？
編集部が厳選した
「にしなり１００景」
大公開！

かなり広い敷地です。少し前まで大きな施設があったんですが解体されて、これから新しい建物が立つみたいですよ。ココがドコだか答えを知りたい人は、このコーナーの右下をご覧ください！　さて、今回でココドコは終了です。ありがとうございました！

［先月号の答え］ 大阪メトロ花園町駅からすぐ、花園北2丁目15-23の「スーパー玉出 花園店」でした！改めて見ると、この時計けっこう大きいんです。

2023年12月撮影

［今月号の答え］ 西成区長橋2-5-33、市民交流センターにしなりの跡地でした！

smile
ゆ～とあい
にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ～とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 3月号（vol.205）
発行日：2024年 3月 1日（創刊日：2007年 1月 1日）
発行：株式会社ナイス
住所：大阪市西成区長橋 3-6-33
電話：06-6563-1150
E-mail:info@nice.ne.jp
url:https://www.nice.ne.jp/

編集長：西田吉志
編集：沖田一志、笹川勝正、田岡秀朋、福井龍磨、安田拓也、山村裕太、若松司（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki　デザイン：谷口円

（株）ナイス
ホームページ